

日英語に於ける複合語の生産性と意味

山 田 伸 明*

The Productivity and Meaning of Compound Words in English and Japanese

Nobuaki YAMADA *

0. はじめに

日英語共に複合語は新しい概念などを表わすために、日々生産されている。例えば、日本のコマーシャルには〈駅前留学〉、〈お茶の間留学〉という表現で、従来とは異なる「留学」らしきものの概念を作ろうとする。また、雑誌などに於いては、〈アドリブ宰相〉、〈パラサイト国家〉、〈ワイドショー政治〉など新しい複合語がどんどん作られている。¹⁾ 〈あゆ現象〉、〈相続エリート〉というような複合語になると、説明されなければ何のことを言っているのかわからない。²⁾

英語でも「暖かい飲み物」を意味する 〈hot lids〉、「社会的地位の高さを示すような高級車」を意味する 〈land yachts〉³⁾、〈guppy effect〉⁴⁾ など新しい複合語がどんどん生み出されている。また Quirk et al. (1985) は、〈the electricity company man〉は ‘a man from the electricity company’ の意味では普通、複合語としては座りの悪い表現であるが、以下の様な対話の文脈内では十分使用可能な表現であるという。

A: Today *a man from the electricity company* called.

B: Oh, so what did *the electricity company man* say? (p. 1331)

この様に、文脈内でのみ使用可能な複合語も多々ある。その他、航空機内の前の座席との空間を表わす 〈legroom〉、日米安全保障条約は日本の軍備強化を防ぐためのものであるとういことを示すたとえとして用いられる 〈cap on the bottle〉、「おべっか」の意味を示す 〈soft soap〉 など、様々な種類の複合語がある。以下がその具体的な文脈内での例である。

*外国語教室 (Department of Foreign Languages)

- (1) To avoid deep-vein thrombosis, shouldn't doctors recommend that the seats in airplanes have more legroom? ⁵⁾ (Time, August 6, 2001)
- (2) To some, American troops in Japan and the U. S.-Japan Security Treaty are the only "cap on the bottle" that suppresses such a development. (Japan Times, August 23, 2001)
- (3) They (American and Israeli leaders) never held him (Arafat) accountable for his serial violations of the Oslo pact, and the media went along with the soft soap. (U.S. News & World Report, August 13, 2001, p. 56)

以上の様に非常に生産性のある日英語の複合語の意味特徴とその分析法を以下では検討する。

1. 複合語の定義

並木 (1985) は、英語の複合語を定義し「2つ (以上) の語がまとまりをなすとき、全体の意味が部分の意味から論理的に推測できない場合には複合語である」(p. 78) とし 〈darkroom (暗室)〉, 〈eggplant (なす)〉, 〈catfish (ナマズ)〉などの例を挙げている。Jackson et al. (2000) も、以下の様に、ほぼ同様な定義をしている。

Compounds are characterized semantically by the fact that they tend to acquire specialized meanings, thus becoming very much like idioms. Only in rare cases is the meaning of a compound derived from that of its constituents in the literal sense. (p. 81)

しかし、Jackson の上記の定義は、複合語は論理的に推論できない場合が多いが、少しは、論理的、言い換えれば、構成要素の意味から複合語の意味が理解できる場合もあることを示唆している。従って、複合語にははっきりと意味的に特殊化しているものと、かなり透明で構成要素の意味から分析可能なものまであることがわかる。それゆえ、ここでは、意味が特殊化したものも、構成素の意味からほぼ分析可能なものまで複合語に含めることにする。

さて、日本語の場合はどうであろう。影山 (1997) では、「語彙的複合語 (1 語としての独立性が認められる) は様々な程度に意味が慣習化されているが、統語的な複合語 (V1, V2 に独自性) は意味的に透明である」(pp. 68-69) としている。従って、〈あゆ現象〉のような構成要素の意味から推測が困難なもの、構成要素から意味が分析可能な、〈日本防衛義務〉, 〈国際社会〉, 〈主権回復〉のような意味的に透明なものまで複合語に含められている。⁶⁾ 以上のことから、複合語は、意味の特殊化の程度差がかなりあるといえるが、本論では、日英両語において意味的に特殊化されたものも、かなり意味的に透明なものまで複合語と考える。

2. 従来の分析法

初期の生成文法では Lees に代表されるように、複合語は変形によって生み出されるものとして扱われていた。しかし、〈smokescreen〉は単一の意味ではなく、‘a screen which is made of smokes’ と ‘means of hiding one’s intentions’ というように、少なくとも二つの意味がある。⁷⁾ また、影山 (1999) によれば、〈truck-man〉は ‘man who drives/ mends/ sells/ buys....trucks’ というように様々な意味に取れる。また、すでに指摘したように、構成要素からのみでは分析できない、固定した特殊な意味を持つ。例えば、〈garbage-man〉は、単に、「掃除をする人」ではなく「清掃夫」という様に。従って、Downing (1977) は、複合語は変形によって生成することには、問題があるとして以下のように述べている。

It is apparent that any attempt to formalize these factors in terms of a list of possible compounding relationships is bound to fail. Since virtually any relationship may serve in the appropriate context, such a list would be so long as to be useless. (p. 840)

意味論的な言い方をすれば、構成性の原理で複合語を扱うことには問題があるということである。しかし、Downing (1977) は傾向としてまとめ得る意味関係があるという点に注意して行きたい。それは、以下の様な関係である。

Whole-part (duck food)
 Half-half (giraffe-cow)
 Part-whole (pendulum clock)
 Composition (stone furniture)
 Time (summer dust)
 Place (Eastern Oregon meal)
 Source (vulture shit)
 Product (honey glands)
 User (flea wheelbarrow)
 Purpose (hedge hatchet)
 Occupation (coffee man) (p. 828)

3. 最近の分析法

最近の複合語の分析法としては、Pustejovskyによって代表される生成レキシコンによる分析

と、主にblendingという概念により分析しようとする認知意味論をあげることができる。後者に関して主に述べるが、まず、前者の分析法を見て行こう。

3.1 生成レキシコン理論

生成レキシコン理論 (Generative Lexicon Theory) は、従来の論理学的な意味論とは異なり文脈を重視する。その点を Pustejovsky (2001a) は以下の様に述べている。

Language is the instrument it is since the same expression can serve countless purposes because the semantic features (meanings) change in context. (p. 53)

このために従来の論理演算に加え、特質構造 (qualia structure) を設けている。この特質構造には Formal role (形式役割), Constitutive role (構成役割), Telic role (目的役割), Agentive role (主体役割) という4つの役割がある。その定義は以下の通りである。

FORMAL: the basic category that distinguishes the object within a larger domain;

CONSTITUTIVE: the relation between an object and its constituent parts;

TELIC: the object purpose and function;

AGENTIVE: factors involved in the object's origin or "coming into being."

(Pustejovsky, 2001a: 56)

例えば、Pustejovsky (2001a) によれば、〈food〉は物質としての食べ物という形式的 (Formal) な面と、それを作る人すなはち主体 (Agentive) がいて、foodは食べるのが目的 (Telic) であるという面を持っているとしている。さらに、〈lunch〉の場合は「昼食の時間」という意味もある。このよう特徴の色々な面に焦点を当て、実際の文脈では、文が使用されている。

この点を説明しようとして設定されたのが特質構造である。⁸⁾ この特質構造その他を論理式に採用し文の意味構造を生成しようとするものである。Pustejovsky (2001a) はその点を以下のように述べている。

Another crucial assumption in Generative Lexicon Theory is that, rather than assuming a fixed set of primitives to describe word meaning, we assume a fixed number of generative devices that are used to construct semantic expressions. (p. 56)

複合語に関しては、影山 (1999) がこの理論の応用を試みている。それによると、例えば、〈恋愛小説〉は構成役割が関与しているものととらえ、この複合語の意味は 'story (y) related to love affair' (p. 57) であるとしている。また、〈児童小説〉は、目的役割が関与するとしている。

しかし、生成レキシコン理論による分析はあくまでも構成性の原理 (principles of compositionality) に基づいている。従って、影山 (1999: 57) が指摘するように、必ずしも日曜大工は日曜にするのではなく、他の休日に行うことが考え得るので、〈日曜大工〉というよう

な基本的な複合語を分析する場合でも問題点が出てくる。〈冠食品〉⁹⁾のような、日々新たに生産される複合語は、この枠組みでは分析しきれないものも多いであろう。英語の場合でも、〈darkroom (暗室)〉や〈strongman (独裁者, 《政界などの》有力者)〉など、独自の意味を持っている複合語はこの理論では説明できない。ましてや、〈soft head (ばか)〉の様なメトニミックな複合語や〈urban jungle〉の様なメタフォリカルな複合語は分析不可能であろうし、さらに特質構造に類似した枠組みを設定してこれらが分析可能になっても、考えられないほど複雑な論理演算が必要になるであろう。

3.2 ブレンディングによる分析

認知意味論の立場に立つ Coulson (2001) はフレームの *blending* という概念を用いて複合語を分析しようとしている。さて、Coulson の立場は、あくまで構成性の原理を守ろうとする生成レキシコン理論とは大きく異なる。従って、Coulson の具体的な複合語の分析を見る前に、彼女の意味に対する考え方を示す。

Coulson (2001) は、文脈から独立した意味は幻想にすぎない。意味は文脈によって常にその場で生み出されるとする。以下の二箇所の引用からもその点がうかがえる。

Because cognitive activity mediates the relationship between words and the world, the study of meaning is the study of how words arises in the context of human activity, and how they are used to evoke mental representations. (p. 17)

Rather, meaning emerges from the integration of linguistic and nonlinguistic knowledge, as meaning and background are intimately intertwined. (p. 31)

例えば、(4 a) と (5 a) では大きな違いがある。後者は、階段から転げ落ちることを意味するが、前者は、喜んで降りてくるという意味である。従って、(4 b) (5 b) で示されているように、文脈によって発話の意味は大きく左右されるのである。¹⁰⁾

(4a) Jaimie came bouncing down the stairs.

(4b) Paul ran over to kiss her.

(5a) Jaimie came bouncing down the stairs.

(5b) Paul rushed off to get the doctor. (Coulson 2001: 34)

また、(6) は (7) のような文脈があれば、「皿洗い器の中にマリファナを隠した」という意味になるし、また、別の文脈では、「皿洗い器の中にポットを入れた」という意味になる。

(6) John put the pot inside the dishwasher.

(7) because the police were coming. (ibid., pp. 35-6)

さて, Coulson (2001) は, 発話を理解するには, 単に文脈の相違だけではなく, 一つの発話内でも, 発話の基にある背景的知識すなわちフレームは交換が行われることがあることを理解しなければならないとしている。これを彼女は frame-shifting と言っている。例えば, (8) は最初は分娩に関するフレームを発話理解に於いては想起するが, コロン以下では妻の化粧に関するフレームを想起する。また, (9) に於いては, 最初は投資に関するフレームを, しかし後半では買収に関するフレームを想起する。

(8) My wife did natural childbirth: no makeup.

(9) One good way to invest in the country is to buy a congressman.

(ibid., pp. 67-8)

また, (10) の父親の発言と (11) の母親の発言には frame-shifting が起きている。

(10) When I was in my prime, I could have easily pinned Hulk Hogan.

(11) Of course, dear. But when your father was in his prime, Hulk Hogan was in the kindergarten. (pp. 211-2)

さらに, 下記の引用からわかるように, Coulson (2001) に於いてもう一つ重要な概念は blending である。この blending という概念が複合語の意味の理解に大きく関与する。

Rather than just retrieving and instantiating frames, speakers are continuously and creatively building and blending cognitive models to yield new concepts, construals, and activities. (ibid., p. 282)

Coulson (2001) は, この blending は composition, completion, elaboration という三つのプロセスからなるとしている。以下がその定義である。

composition---attributing a relation from one space to an element or elements from the other spaces.

completion---pattern completion that occurs when structure projected from the inputs matches information in long-term memory.

elaboration---a process that involves performance and/or mental simulation of the event in the blend and is constrained by a logic (or illogic) of the blended domain itself. (p. 122)

ちなみに, 複合語を扱っている第5章ではこの三者の区別はほとんどしていない。特に

elaboration に関する言及はこの章にはない。

さて、具体的な彼女による複合語の分析を見てみよう。〈gun wound (拳銃による傷)〉の概念的なフレームのblendingは以下の通りである。

Input 1	Input 2	Blend	Generic
Gun	Wound	Gun Wound	Violent Act
Elements	Elements	Elements	Elements
Agent	Dangerous Act	Agent	Violent Act
Target	Human	Human	Patient
Gun	Means	Gun	Means
Result	Wound	Gun Wound	Damage
Relations	Relations	Relations	Relations
Shoot	Cause	Shoot	Cause
(Agent, Gun, Target)	(Dangerous Act, Means, Human)	(Agent, Gun, Human)	(Violent Act, Means, Patient)
Result	Result	Result	Result
(Result)	(Wound)	(Gun Wound)	(Damage)

(p. 130)

すなわち、Input 1 (gun) と Input 2 (wound) が合成 (composition) されて、さらに Generic に照らしあわせて、blending が完成するというものである。これが最も基本的な複合語のblendingのプロセスである。〈caffeine headache (カフェイン不足が原因の頭痛)〉や 〈nicotine fit〉になってくるとそれらが不足していない状況と照らしあわせるために counterfactual frame への写像 (mapping) も行われさらに複雑化する。また 〈hot lid (コンビニで売られている暖かいコーヒー)〉になると 〈lid (蓋)〉 と中の飲み物を関係づけるために、metonymic blend が行われ、さらに 〈cold lid〉 と対照させるために Cross-Domain Mapping を行うというように、複数のフレームが設定され、それらが blend されたり写像されたりする。〈land yacht (ヨットの所有車を想起するような富豪しか買えない豪華な車)〉になるとそのblendingに必要なフレームとプロセスはさらに複雑化する。

彼女のフレームとblendingを組み合わせた理論は、先に述べたように、常に場面や文脈に対応した意味である。従って、彼女が説明しているように、〈fake gun〉などは、「偽造拳銃」という default 的な意味以外にも、場面場面でフレームを設定すれば、パイプや指、さらにはズッキニーで被害者をごまかして、拳銃に見せかける場合も対応できる。また、Coulson and Fauconnier (1999) では、この枠組みは 〈stone lions〉は石のライオン像だけではなく、じっとしているライオンや追放された独裁者など文脈によって意味が変わるが、そのような場合にも対応でき、さら

には、石のそばで遊んでい／立つているライオン・石の上で寝ているライオン（動物園）というようなあらゆる場面に対応できるとしている。従って、素性を組み合わせ、合成して行く、生成レキシコン理論的な分析よりもすぐれているとして、以下のように述べている。

The examples discussed in this chapter all support Barsalou's (1993) suggestion that what are combined in particular cases of concept combination are frames created temporarily for the service of meaning construction in a particular context. The role of the knowledge base in long term memory is one of constraining the topology of the mappings and completing unfilled slots in frames at various levels. The productivity of our concepts seems to be centrally rooted in the ability (i) to accommodate frames at varying levels of abstraction to suit various contextual conditions; and, (ii) to reabstract aspects of accommodated frames for further application. (Coulson 2001: 159)

実際にはここでは、この理論の応用を具体的には試みないが、先に挙げた、〈冠食品〉とか〈日曜大工〉というような複合語を分析しようとする場合、フレームの組み合わせや metonymic blend などによる分析が必要になる。また、〈urban jungle〉や〈ならずもの国家〉などメタファー的な表現は、単なる blending のみならず、completion と elaboration の段階で「文化モデル」への参照と、またそのモデルの blending から生ずる裏の意味の検討も必要になる。¹¹⁾ 例えば、〈urban jungle〉なら〈urban〉と〈jungle〉のフレームの blending のみならず、都会のスラムとジャングルの鬱蒼とした状態を反映したモデルとの blending が必要になってくる。〈Iron Lady〉、〈ならずもの国家〉、〈駅前留学〉、〈お茶の間留学〉などメタファー的表現を含むものは、ほとんどすべて同様なことが言える。

しかし、このように複雑な blending と文化モデルへの参照、並びに、そのモデルの blending ですべての複合語の特徴が解決できるであろうか。例えば、新しい複合語として紹介されているたこ焼風の食べ物である〈爆弾焼〉や、ぼったくり店の一種である〈プチぼった〉も二つ以上のフレームの blending と文化モデルなどを参照して分析すべきであろうか。¹²⁾ ちなみに、〈爆弾焼〉は〈爆弾〉と〈たこ焼〉のフレームの blending と考えて分析して良いであろうか。むしろ、この新語を作った人は、直観的に「爆弾焼」の作り方などを見てこの複合語を思い浮かべたのではなかろうか。とにかく、Coulson の枠組みと意味生成のプロセスは複雑過ぎるのではなかろうか。Gibbs (2000) も、以下のように、その点に疑問を投げかけている。

Must people actually create complex blended spaces to understand what speakers intend by this expression? Do listeners create new blended spaces each and every time they hear an expression? (p. 351)

4. おわりに

以上、複合語に関する分析法に関して検討してきたが、いずれも、一つの手法で分析している点に問題がある。生成レキシコンによる分析は、様々な文脈から生じる意味を従来の論理演算に特質構造などを加え、あらゆる複合語を構成性の原理で説明しようとしている点に無理があるのではなかろうか。一方、認知意味論的なフレームのshiftingやblendingによる分析も、総ての複合語がこの分析法により処理できるとしても、そのフレームのblendingの仕方などが複雑過ぎて私たちの言語直感を反映しているものとは到底考えられない。すなわち、現在行われている分析法はあまりにも自分の主張しようとする理論にとらわれ過ぎていてのではなかろうか。

筆者は、複合語の意味特性には、統語論的、意味論的、ならびに、語用論的特性が総てかかわっていると考える。それも、上記三要素のかかわり方は、それぞれの、複合語により程度の差があると考ええる。

例えば、日本語の〈日本防衛義務〉、〈国際社会〉、〈主権回復〉などや、英語の〈bookcase〉、〈ash-tray〉、〈fingerprints〉等は、統語的な分析では説明可能である。また、グリーン色の物も指しうる〈blackboard〉や¹³⁾、日曜以外の時間でも家庭で行い得る大工仕事を指す〈日曜大工〉は元々統語的に生成されたものが、意味的に拡張されともと考えれば良い。逆に、暗室を意味する〈darkroom〉などは意味的に特殊化されたものである。また、「偽装工作」を意味する〈smokescreen〉などは、基本的な意味からメタファー的に拡張されたものである。

さらに、普通、統語的には扱えないとされている、〈land yachts〉、〈soft soap〉、〈hot lids〉、〈あゆ現象〉、〈爆弾焼〉、〈パラサイト国家〉なども基本的には「名詞+名詞」あるいは「形容詞+名詞」という統語的な枠に、メタファー的な拡張やメトニミー的な拡張、さらには、その他の人間の想像力によって作り出されるイメージを当てはめて生成されているのではなかろうか。また、ある物に関する知識や場面を表わすのに最もふさわしい簡潔な複合語構造を作り出し使用している場合もある。例えば、女性が外国人と良く結婚する傾向を表わしている〈恋愛亡命〉はそのような例と言えよう。¹⁴⁾ 従って関与の程度はそれぞれの複合語によって異なるが、いずれも、程度の差はあれ統語構造がかかわっている。(例外的にはBarlow et al. (2000) が指摘するようにある諺や決まり文句に基づいて生み出されるものもあるが。)¹⁵⁾ また、意味的特徴ならびに語用論的特徴も、それぞれ異なった程度で関与していよう。言語学の範囲では扱いきれない文脈に関連した背景的知識も関与して新たな複合語が日々創造されて行く。従って、最近の複合語の分析のように一つの理論にあてはめようとするには、少々無理がある。少なくとも、以下のVioli (2001) からの引用で指摘されているように言語表現の意味には、言語学的意味と百科事典的な意味が関与しており、その両者がある程度区別する必要があるだろう。

it is possible to distinguish between a more restricted semantic component, which is the linguistic meaning as such, and a more general encyclopedic knowledge. (p. 205)

注

- 1) <アドリブ宰相>は、マスメディアに訴えることがうまい小泉首相のことであり、<ワイドショー政治>はテレビメディアをうまく利用する小泉政権の政治手法を指す。いずれも、『論座』2001年8月号より。
- <パラサイト国家>は、防衛面を米国に依存している日本のこと。『軍縮』2001年9月号より。
- 2) <あゆ現象>とは、『月刊言語』2001年8月号によれば、「歌やファッションで浜崎あゆみのまねをすること」で。<相続エリート>は『月刊言語』2001年10月号によれば、「政治家の二世、三世」のこと。
- 3) Coulson (2001) 参照。
- 4) <guppy effect>とはguppyは典型的な魚でないのにpet fishになるとこれが典型的な魚になること。すなわち、単語の示す指示物とその単語が複合した場合は典型性が異なってくることを示す用語。Langacker (1991) 参照。
- 5) 下線部筆者。以下同様。
- 6) 影山 (1997) は統語的複合語と語彙的複合語をはっきり区別している。尚、ゆもと (1997) にも類似した記述あり。但し、彼の言う要素の組み合わせで形成されている「あわせ」単語は、各要素にを組み合わせた意味とは異なる特殊な意味を持つとしている。
- 7) Ballard (2001) 参照。
- 8) これらは、Langacker (1991) のActive Zone (活性領域) の概念に対応する。これは<a red pencil>が「赤鉛筆」の意味と中は赤の芯でなくても「外観が赤い鉛筆」の意味があることなどを説明するのに用いられている。Cruse (2000) にもこの概念はbookが文脈によって「物としての本」の意味になる場合、と「内容としての本」の意味にもなることなどを説明するために用いられている。
- 9) 冠食品とは「テレビなどによく登場する有名シェフなどの名前を冠した冷凍食品やレトルト食品」のこと。『月刊言語』2001年6月号参照。
- 10) この場合は「文」の意味というよりは、普通は「発話」の意味ということになる。
- 11) この点に関してはCoulson (2001) の第6章を参照されたし。
- 12) 『月刊言語』2001年9月号参照。それぞれ、<ばくだん焼>は「若者たちに人気を集めているたこ焼風の食べ物。一見するとたこ焼だが、食べてみるともんじゃ焼きのようにトロトロ...」、<プチぼった>は「客のもっていそうな最高の額を請求するぼったくり店。」と説明されている。
- 13) Jackson et al. (2000, p. 81) 参照。
- 14) <恋愛亡命>は津田幸夫『英語下手のすすめ』KKベストセラーズ2000年の中で使用されている複合語。
- 15) Barlow et al. (2000)によれば、例えば、(a)の文は「なおあることがらは終わらない」という意味で使われる決まり文句であるが、これを基に、(b)あるいはその他のいろいろな変形した表現が作り出されているということである。ところで、<fat lady>は主役のオペラ歌手を意味する。日本の落語の真打ちに相当すると考え得る。

(a) It ain't over till the fat lady sings. (p. 330)

(b) And the fat lady is warming up. (p. 333)

参考文献

- Ballard, K. (2001) *The Frameworks of English*. Palgrave.
- Barlow, M. (2000) Usage, Blend, and Grammar. In M. Barlow and S. Kemmer (eds.) (2000) *Usage Based Grammar of Language*. CSL Publication, pp. 314-345.
- Coulson, S. (2001) *Semantic Leaps*. CUP.
- Coulson, S. and G. Fauconnier. (1999) Fake Guns and Stone Lions: Conceptual Blending and Privative Adjective. In B. A. Fox et al, (eds.) (1999) *Cognition and Function in Language*. CSI Publication, pp. 143-158.
- Cruse, A. (2000) *Meaning in Language*. OUP.
- Downing, O. (1977) On the Creation and Use of English Compound Nouns. *Language*, Vol. 53, No. 4, pp. 811-842.
- Gibbs, R. W., Jr. (2000) Making Good Psychology out of Blending Theory. In *Cognitive Linguistics* Vol. 11, 2000, pp. 347-358.
- Jackson, H. et al. (2000) *Words, Meaning and Vocabulary*. Cassel.
- Langacker, R. (1991) *Concept, Image, and Symbol*. Mouton de Gruyter.
- Pustejovsky, J. (1996) *The Generative Lexicon*. The MIT Press.
- Pustejovsky, J. (2001a) Generativity and Explanation in Semantics: A Reply to Fodor and Lepore. In Bouillon and F. Busa (eds.) (2001) *The Language of Word Meaning*. Cambridge University Press, pp. 51-74.
- Pustejovsky, J. (2001b) Type Construction and Logic of Concepts. In Bouillon, P. and F. Busa (eds.) (2001) *The Language of Word Meaning*. Cambridge University Press, pp. 91-123.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of English Language*. Longman.
- Violi, P. Translated by J. Carden. (2001) *Meaning and Experience*. Indiana University Press.
- 影山太郎『形態と意味』くろしお出版 1999年
- 影山太郎・由本陽子『語形成と概念構造』研究社 1997年
- 並木崇康『新英文法選書 第2巻 語構成』大修館書店 1985年
- ゆもとしょうなん「あわせ名詞の意味的記述をめぐって」斎藤・石井『語構成』ひつじ書房1997年 pp. 176-191